# 首都大はどこにあるのか

## ―ＦＤ・ＳＤセミナーに参加して―

首都大学東京管理部教務課教育支援・評価係
宮林　常崇

大学の仕事に慣れ始めたある日「自分が普段過ごしている職場（大学）に、少し距離を置いて見ている人もいるようだ」と感じることがあった。そのうち「首都大を自分の大学だと思っている人がどれ位いるのだろう」ということが気になった。果たして「首都大学東京」とは誰の、どこに、あるものなのだろうか？

そんな私が参加することになったこのセミナー、２日目はグループワークと聞いていたので、当事者意識のない「白けた」議論で終わってしまうのではないか、と不安であった。

１日目はＦＤと合同で、学内外の講師による講演会。吉武先生の講演の中で「いま首都大学東京が社会での立ち位置で悩んでいるように､筑波も悩んでいる」「大学論ではなく〇〇大学論であるべきだ」「卒業生がいることがその大学の存在意義」・・・私の中でもやもやしていた様々なことが「言葉」に置き換えられ、具体化されていく時間であった。

また、民間企業出身の先生ならではの切り口で大学の様々な問題を考察していく展開は、民間出身の私にはとても馴染みやすかった。大学に関する出版物や講演会などから知識を吸収しようと努めてきたが、「大学から見た社会」を論じるものが多く、社会と大学の接点を「社会の側から」論じているものはあまりなかった。

もしかしたら大学を社会の側から論じることすら、大学人にとっていまだ違和感のある時代なのかもしれない。しかし、公立大学法人である本学にそれは許されない。大半の学生が朝から真面目に大学に来てしまう？今の大学に私も違和感があるが､「単位制度の実質化」などの流れは、昔の大学のままでは済まされない時代になってきた。その時代の一番先を走っている先生の講演を、職場の研修として聞けたことにただただ感謝するばかりである。

不安な２日目のグループワークは、１日目の講演内容が参加者間の共通言語として機能したおかげで、スムーズにテーマの核心に辿り着くことができた。もし、このグループワークが、初日のＦＤセミナーを経ていなかったとするならば､私の不安が的中していたかもしれない。それだけ１日目の講演は､私たち職員に知識だけでなく、意識にも効果のある内容で、白熱した議論のきっかけになった。

果たして１０年後の法人はどうあるべきか、そのために我々職員は何をすべきか、というテーマに対し、私のグループでは「大学を、職場を、仕事を好きになる」というフレーズでまとめた。

様々な職場に属している６人が、現在目の前で起きている問題、抱えている不安などを語りあい、そして解決策を模索しあう過程で出てきた答えがこのフレーズ。ある私学のように「学生・教員・職員が愛校心で一つにまとまる」姿が、公立である本学が目指す姿ではないかもしれない。しかしながら、反対に無関心すぎるのはどうだろう。その思いを私だけではなかったことにうれしくなり、そして安心した。

議論の中で「この大学は、挨拶ができない人が多い」「守衛さんに挨拶したことありますか」という発言があったが、身近なところから変えられるヒントもあるのだなと教えてもらった。短い時間であったが、刺激の多いグループワークであった。

我々職員一人一人が「首都大を好きになる」ことからはじめよう。すると、首都大が「自分の」「胸の中に」やってくるものだと知った。そんな、２日間であった。

最後に、研修の機会を設けていただいた関係各位の皆様に御礼申し上げます。